

# 短期大学部 公募制推薦入試 (前期) 「小論文」

## びわこ学院大学短期大学部 平成三十年年度 推薦入学試験 「小論文問題」

次の文章を読み、あなたの考えたことを六〇〇字程度で述べなさい。

「結果のコミュニケーション」とは、コンサルティング会社のアドバイスをもたないながら導入した手法で、メンバーが自発的な目標を定め、リーダーとの間で約束(コミットメント)したら、その合意の結果をしつかり検証する、というものです。

まず、メンバーにはそれぞれ、今までもうまくいってなかったことも、実は自分たちの選択であったことを自覚してもらい、自分で目標を立てさせるのです。これはノルマではありません。本人発のコミットメントなのです。

それからリーダーであるF課長と合意をする。その後は「これは絶対に果たさなくてはならない。なぜなら自分で約束したんだから」とルールとして確立していく。

実際には強制のようなものなのですが、中身は自分で考えて交わした約束なのだから、形としては自発的、主体的な目標である、というところがミソでした。今までは、リーダーが決めた目標に受け身で、自分から行動しているつもりだったが実はそうでなかったこと、覚悟しているつもりだったが、覚悟に至っていなかったことに気付くことが大事でした。

毎日営業日誌をつけさせましたが、管理を細かくしたわけではありません。プロセスの指標をつくと、最終的に結果、実績が出せなくても「努力はしているからしょうがないよね。決めたプロセスは踏んでやっているものね」という言い訳になってしまい、責任感が薄れ、壁はぶち破れない。なので、どのようにやるの現場が自由に工夫してやるように、大事なものは約束した目標を達成することだ、と言いました。

そして、月単位での営業結果についてのフィードバックを徹底。メンバーとF課長が膝詰めで「結果はどうだったのか。目標が達成できていなかったとすればなぜできなかったのか」「努力が足りなかったのか」「こうすればよいのでは」という問答をお互いが納得するまで突き詰めた。

結果のクロージングにこだわる。これが「結果のコミュニケーション」です。メンバーのひとは、「やったつもり、が許されない。見てないことは悪、やっていないことは悪。逃がさない、逃げられない」という環境だった」と振り返って言っていました。メンバーは逃げ場もなく、徐々に本気になってきました。

### 《中略》

不思議なことに、結果が出ずとも、ガマンして4カ月目に入ると、皆、身体が慣れてきました。これは全員が同じことを言っていました。スポーツの練習と同じで、しんどさを超えると、それが普通だと思える状態になってくるのです。一軒一軒のドアをノックするのが苦ではなくなり、販売ツールを届けるといような大義名分がなくとも平気で「こんにちは! 景気どうですか?」とご近所の知り合い感覚で顔を出すことができるようになってきたのです。

すると不思議なことに、いい反応が少しずつ返ってくるようになってきました。「また来たの?」じゃあ、今度ちよつとつてみようか」となってくる。

### 《中略》

あるとき、こんな話をされたことがあったそうです。「これまで顔の見えないキリンビールを売っていた。何の情報もなかったから、キリンがいいのか悪いのかもわからなかった。でもそこに君というキリンの顔が現れた。自分たちが売っているビールの会社の人間が来て話をすると、うれしさやキリンのビールに対する信頼を感じるようになった」と

そういう反応が出てくると、気力を失いかけていた営業マンがやりがいを感じるようになり、主体性と創意工夫が生まれてきます。

相手の立場になって、何が喜ばれるかを考えるようになってきました。

(田村潤『キリンビール高知支店の奇跡 勝利の法則は現場で拾え!』講談社)

# 短期大学部 公募制推薦入試 (前期) 「教養問題 国語」(1)

## びわこ学院大学短期大学部 平成三十年年度 推薦入学試験 「教養問題」

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ダーウィンは「知能」という言葉でミミズの行為に見たことをあらわした。彼の見たことは、ミミズの行為がほとんど柔軟で多様であること。しかし柔軟がかつ多様でありながら、環境にあつて行為が使えること、つまりいまミミズがふさうとして穴にふさわしい物をまわりからしつかりと見つけている、ということである。

この二つ、限らない柔軟性、多様性と、環境にあつていま進行中の行為に利用できそうなことを偶然にはなく、ちゃんと見つけて出すというところは、たしかに「知的だ」と言われている人間の行為の特徴でもある。たとえば山小屋で予想以上の「ア」カシキに出会った時、小屋が古くてあちこちに穴があいていたら、ぼくも持っている衣類や紙類などで、あるいは周辺にある思いもかけない物で穴ふさぎをするだろう。

ミミズの生をかけた行為に比べれば少しスケールが小さくなってしまふけれども、日常のなげない行為のほとんどもダーウィンのミミズに見たことに(イ)ルイジしている。

たとえば、「かくれんぼ」した時のことを思い出してほしい。ぼくらは子どものころ、鬼の「もういいかい」という声を聞きながら、「まあだだよ」と言っていて、まわりに「身を隠すところ」を探したものだ。探されたところは多様だった。木の太い幹の陰、大きな岩の向こう側、その中にしゃがんでしまえば姿が見えなくなる高く繁った草の中、通りの看板の後ろ、川岸、赤いポストの後ろ、車の下、厚いカーテンの中、ベツドの下、扉の後ろ……

あげればきりがない。

「身を隠すところ」は場所によって違つたし、鬼がだれかによつても違つた。年下の子どもと遊ぶときには、あまり長い間探し出せないで溜って帰ってしまう。だから小さな子どもでもすぐさま場所を見つけた。鬼がいつも一緒に遊んでいる友だちの時には、まだ誰も使っていない思いがけないところを探そうとして苦労した。こう考えると、鬼がつかずつかない課題だったはずなのに、何の苦もなしに遊んだ。「かくれんぼ」の時には、まわりのいろいろな物や場所が「隠れ場所」だった。

たとえば東京の新宿や渋谷の日曜日。歩行者用に開放された車道やデパートの①端路の中などでは、被れは子どもや大人がいるいるなところに腰をおろしている。ガードレールの端、路肩、大きな植木鉢の端、階段の隅、柱の少しふくらんだところ、カバンなど持ち物の上親の膝……「座る」ことに利用されているところを全部書き出そうしたらきりがない。多様な「座るところ」を人々は柔軟に見つけている。

だれでも一度や二度は経験があると思うが、もしビン入りのビールやジュースを飲もうと冷蔵庫から出して、センスがないことに気がついたらどうするだろう。部屋中をいろいろ見回して、センスよく使えそうなところを探す。「あまり広くない幅で、堅い素材でできている溝」がけつこうあることに気がつく。それらのいくつかは「センスを抜けたところ」として発見される。

あらゆる動物が環境の中でしている行為を見直してほしい。

夏休みにはカブトムシを飼う子どもも多い。カブトムシのからだを裏返しにひっくりかえしてみる。そうすると、六本の脚をいろいろな方向に動かして必死に起き上がろうとする。脚の一本(たいていは長い後ろ脚)が「タタミのヘリ」や、「うちわの端」や、「タオル生地」などのひつひつかかるところにふれるやいなや、カブトムシはずぐそこを支点にしてからだをくるりかえつたカブトムシの腹の上に置いてみる。カブトムシはずす六本の脚で抱きつき、するすると着の端が頭の位置にまでくるとに著を動かす。そして頭の上と床の両端で割り箸がつくる傾きをテコのように利用して起き上がる。シンの葉を腹の上においてみると、まず葉をしつかりと抱える。そして葉の柄の部分(その方が重い)を上になるように、ヨットの帆のようにして高く抱えもち、左右に大きくゆすつてその揺れを利用して「一気に反転して、起き上がる」。

カブトムシははじめて出会った、種々の物に「起き上がるために利用できること」を柔軟に探して使う。このような観察を続ければ、カブトムシが起き上がりに利用するところがどんどん増えるだろう。使う物によって起き上がりまでの行為はまったく多様である。しかし、いろいろなどころに起き上がりに使えるところをちゃんと探し当てて。

AO入試

指定校制  
推薦入試

公募制  
推薦入試

自己推薦入試

一般入試

センター利用入試

社会人入試

外国人  
留学生入試

編入学試験

受験上の注意

出願手続

合格発表  
入学手続  
入学辞退

学費

奨学生制度

Q&A

平成30年度  
入試問題

大学  
公募制推薦入試  
小論文

大学  
公募制推薦入試  
教養 (国語)

大学  
公募制推薦入試  
教養 (英語)

大学  
一般入試  
(国語)

大学  
一般入試  
(英語)

大学  
一般入試  
(数学)

短大  
公募制推薦入試  
小論文

短大  
公募制推薦入試  
教養 (国語)

短大  
一般入試  
(国語)

記入上の注意

記入例

短期大学部

公募制推薦入試 (前期) 「教養問題 国語」(2)

ほか人間を含めてあらゆる動物がこの世界でしていることは、原理的にミミズの「穴をさき」と同じである。人間もミミズもカプトムシも、いましている行為が利用できることをまわりに探し続けている。そういう存在なのだ。

ほからの行為はどんな場合も、反射のように固定してはいない。行為ほとんど多様である。だが、けつてランダムに起らない。(ウ) サイゲンのない試行錯誤なんかしてはいない。また行為についての完全なマニュアル(プランなど)といわれている。はもつていない。ミミズが穴をさきに使ったこと、カプトムシが起き上がりに使ったこと、ほからがかくれんぼに使ったことは、こういうものですというふうには「絵」には描けない。それは発見されるまでどのようなことであるか予想できない。「反射」「試行錯誤」「概念」という② 既成の枠組みでは、(一) 行為だけにある創造性が説明できない。

ほからを取り囲むところは行為が利用できることが無限に存在している。これら環境にあつて行為が利用していることを「行為だけが発見することのできる意味」とよぶことにしよう。おそらくほからの行為がこの環境の中でしていることは、環境にあつてほからを取り囲んでいる多様な意味を柔軟に探し当てていくことである。辞書に③ 載つていない、名前のついていない、行為だけが知っている意味がある。

一九世紀にこの世界で起る「変わり続けているありのままのこと」にだけ興味があつたダーウィンという男は、ミミズの行為にもありのままを見た。彼はそれがほからが「知能」とよんでいることと同じであることに気づいたが、特別な名前をつけたわけではない。しかし、観察のあげく、どうやらだれも気づかなかつた行為の本当のことを少しは知つた。

A もうすぐ終わる(一〇世紀、一人のアメリカ人の心理学者が、これも生涯をかけて、再びこのありのままの行為の原理にふれることができた。この男が本書の二人目の主人公である。その名前をジェームズ・ギブソン(一九〇四―一九七九)という。彼はダーウィンが見ていたこと、つまり環境にあつて行為が発見している意味にはじめて独特の名を与えた。アフォードランスである。

英語の動詞アフォード (provide) は「与える、提供する」などを意味する。ギブソンの造語アフォードランス (affordance) は、「環境が動物に提供するもの、用意したり備えたりするもの」であり、それはほからを取り囲んでいるところに④ 潜んでいる意味である。ほから動物の行為の「リソース(資源)」になることである。動物の行為はアフォードランスを利用することで可能になり、アフォードランスを利用して進化した。

たとえばギブソンはこんなふうにいる。

「陸地の表面がほぼ水平で、平坦で、十分な広がりをもつていて、その材質が堅いならば、その表面は(動物の身体を)支えることをアフォードする」、「我々は、それを土台、地面、あるいは床とよぶ。それは、その上に立つことができるものであり四足動物や二足動物に直立姿勢をゆるす。つまりほからが地面とよぶところにあるのは「土」や「石」という名前がつけられているが、それらは動物にとっては身体を「支持する」、その土を「移動する」などのアフォードランスであるというわけだ。

水は、ほからに対して呼吸作用をアフォードすることはない。水は飲むことをアフォードする。水には流動性があるので、容器に注ぎ入れることをアフォードし、溶解力があるので洗濯や入浴をアフォードする。水の表面は(エ)ミツトの高い大きな動物に対する支えをアフォードすることはない。水は、ほからにとっては「喉の湿きをいやす」、「容器物を運搬する」、「汚れを落とす」、道具なしにはその上を「移動しない」、あるいは道具を利用してその上を「移動する」などのアフォードランスの集合である。水にはかなりの時間をかけなければ発見できない「泳ぐ」など、もつとたくさんの、ここには書きつくせないほどのアフォードランスがあるだろう。

このようにして周囲にあることに行為が発見していることを B しはじめると、そこは動物の行為にとって潜在する意味の海であることに気がつく。行為は何もない「空間(スペース)」ではなく、アフォードランスの充満しているところ、すなわち「環境」でおこなわれている。(二) 何もない「空間」というのは人間が考案した「抽象的な容器物」である。そんな「空間」はどこにもない。サンゴもミミズもカプトムシも人間も何もない「空間」にいるわけではない。

(佐々木正人『知性はどこに生まれるか』講談社現代新書)

短期大学部

公募制推薦入試 (前期) 「教養問題 国語」(3)

問一 傍線部①～④の漢字の読みをひらがなで書きなさい。

- ① 雑踏
- ② 既成
- ③ 載(つて)
- ④ 潜(んで)

問二 傍線部(ア)～(エ)のカタカナを漢字に直しなさい。

- (ア) カンキ
- (イ) ルイジ
- (ウ) サイゲン
- (エ) ミツド

問三 空欄 A に入る適切な語を(ア)から(エ)の中から選びなさい。

- (ア) それでは
- (イ) しかし
- (ウ) いわゆる
- (エ) さて

問四 空欄 B に入る適切な語を(ア)から(エ)の中から選びなさい。

- (ア) 定義
- (イ) 計算
- (ウ) 発見
- (エ) 協議

問五 傍線部(一)「行為だけにある創造性」の「創造性」とはどういうことか。本文中のカプトムシを例に百字以内で説明しなさい(句読点等はそれぞれ一字として扱います)。

問六 傍線部(二)「何もない『空間』」というのは人間が考え出した「抽象的な容器物」である。「一抽象的な容器物」でない動物にとつての環境とはどのような存在と筆者は考えているか。本文中の語を用い、八十文字以内で説明しなさい(句読点等はそれぞれ一字として扱います)。

問七 筆者は、なぜ、ミミズの行為を「知能」という言葉で説明できると考えているか。その理由を本文中の語を用い、百字以内で述べなさい(句読点等はそれぞれ一字として扱います)。